

経済拡大する東アジアと日本の原子力協力

読売新聞東京本社 論説委員

井川陽次郎

日本は、これまで、欧米人と同じ視点でアジアを見てこなかったか。アジア人としてアジアを見つめたことがあるだろうか。

日本は、すべての意味で、アジアの一部である。民族、文化は言うに及ばず、アジア諸国は、工業生産の拠点であり、人材交流の場であり、市場でもある。アジア諸国が、安定かつ持続可能な発展を続けることができるかどうか。それは、日本の将来を左右する重大事である。

安定かつ持続可能な発展が可能かどうか。それを左右するのは、エネルギーの安定供給だ。

人間は、民族や宗教の違いだけでは戦わない。紛争の背景には必ず、食糧や資源を巡る紛争がある。富の偏在が拡大し、食糧や資源の奪い合いが頻発すれば、アジアの将来は暗い。

もともと、アジア諸国はエネルギー資源に乏しい。この地域で、どう安定なエネルギー供給を実現するか。日本の役割は大きい。産学官が一定の協力をしている。だが、心もとない。

そもそも、発想が小さい。どこかに原子炉を作る、ということでは足りない。しかも、日本の原子力産業の存立基盤を確保するため、という理由がしばしば語られるようでは、誤解を招く。むしろ、日本にとって、アジア地域での原子力協力は「責務」なのである。

そこで、アジア地域に原子力エネルギーのネットワークを構築するという構想(夢物語?)を提案したい。原子力発電を基幹電力の一つとして確立し、宗教、民族、そして国家の壁を超えて、アジア諸国に安定して電力を供給することを目指す。

ただ、アジア地域で原子力エネルギーの拡大に協力するには、日本が自らの原子力を完結させる努力をますます増さなくてはならない。使用済み核燃料を着実にリサイクルするための核燃料サイクルの実施に加え、廃棄物の確実な処分の実現である。